

この部分を掘削したところ、II層において検出した土坑内よりガラス瓶、陶磁器片が出土し、この落込みがきわめて新しい時期のものであることが判明した。そのほかこのII層からは須恵器甕片3点、土師質甕把手片等7点、瓦片2点など、合計15点出土しているが、いずれも小破片であり、全形を窺うことはできない。いずれもまとまって出土するものではなく、それぞれの遺物の所属時期も異なることから、客土として持ち込まれた土に混入していたものであろう。よってII層の盛土も古い時期になされたものではなく、この拝所を整備した際のものであると判断した。その下は、黄橙色の均質な粘土層であり地山であると判断できる。

下水管理設部分は参道に沿って掘削をおこなったが、表土の下にすぐ地山層が検出され遺構・遺物は一切出土しなかった。

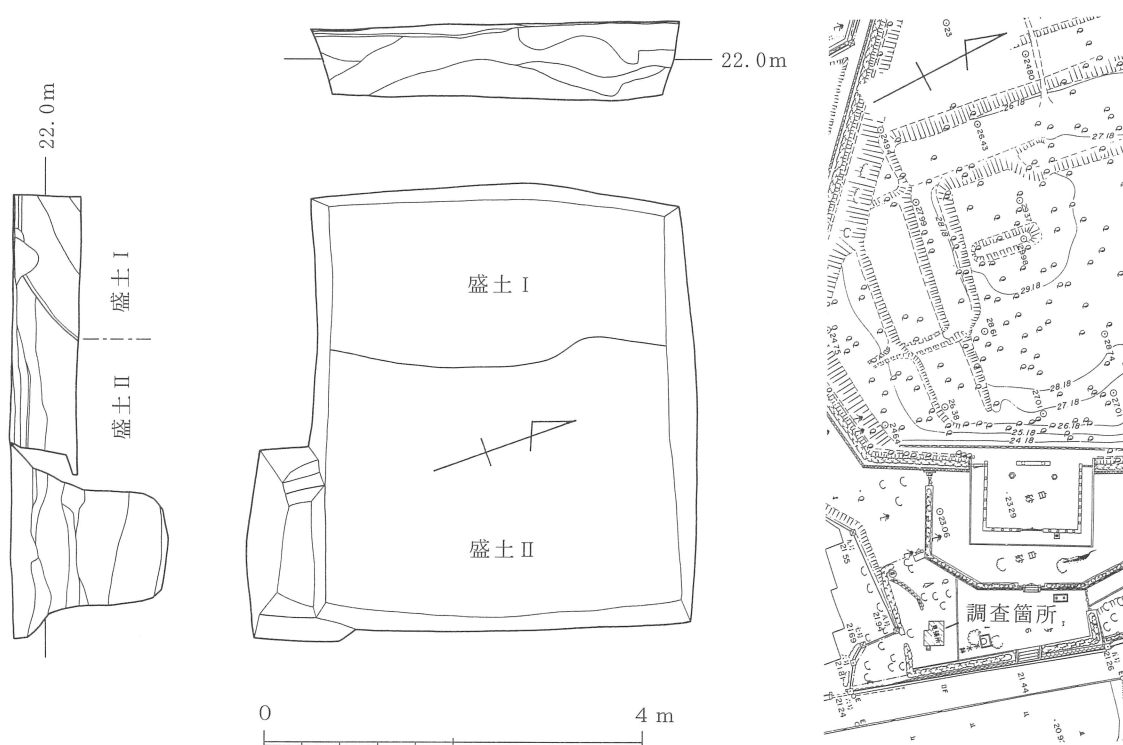
以上の結果から、工事は予定通り施工した。

(徳田 誠志)

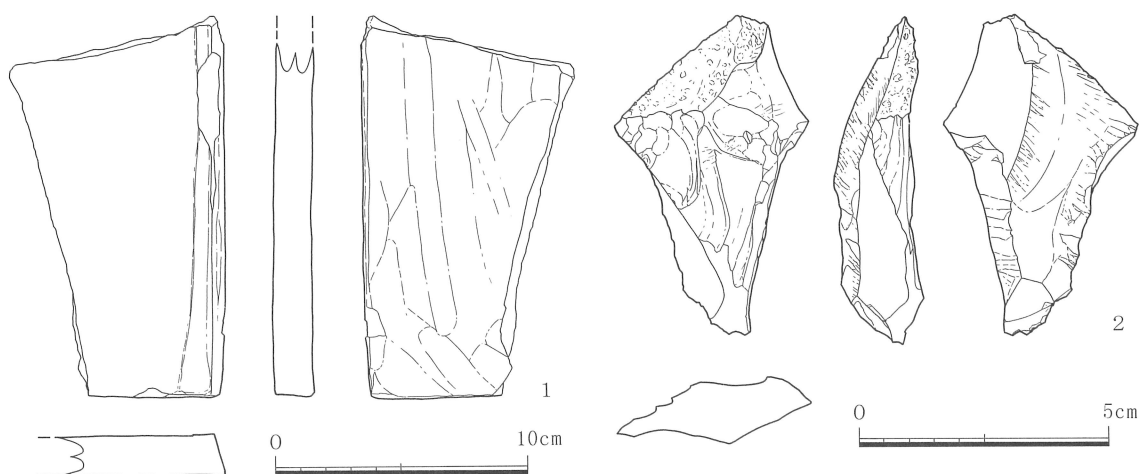
雄略天皇 丹比高鷲原陵見張所改築工事箇所の調査

雄略天皇丹比高鷲原陵は、古市古墳群の西北、大形古墳の密集地域からはやや距離をおいた場所に位置している。この度、陵前にある見張所を改築することとなり、それに伴う調査を、平成10年11月16～19日に本部職員立会のもとに実施した。見張所設置箇所は在来のもので同一であり、新規見張所の基礎工事範囲となる4.2×3.8mの範囲を深さ0.8m、浄化槽埋設箇所は1.7mまで掘削し、調査を行った(第21図)。

調査の結果、発掘範囲内は2時期に分かれる盛土であることを確認した(旧：盛土Ⅰ・新：盛



第21図 丹比高鷲原陵調査箇所の平面図・断面図(1/80)および位置図(1/1000)



第22図 丹比高鷲原陵調査箇所出土品実測図(1/3・2/3)

土II)。Iは全体に暗茶褐色を呈する比較的堅緻な粘質土で、東に下る傾斜をもつように盛られており、最上層の斜面上には、旧表土が確認できる。IIは全体に灰白色を呈する軟らかい粘質土で、Iとは異なり水平に盛られている。また、盛土IIの下には隣接する水田の耕土を検出しており、断面では確認できていないが、盛土Iの斜面下端と耕土面はつながる可能性が高い。この両者には、土質や堆積状況の他、Iでは遺物が出土し、IIでは出土しないというような違いも指摘できる。

なお、盛土の時期であるが、盛土Iは拝所造成時の明治18年のものである可能性が高い。盛土IIは、その後拝所の拡張がなされ、既設見張所が設置された大正15年のものと思われる。

出土遺物は、3点が盛土Iのみから出土している(第22図)。1は平瓦の破片である。端部に薄い突帯を削り出している。黒色を呈する。2は、サヌカイトの剥片である。もう1点は図示し得ない土師器小片である。これらは、いずれも客土として持ち込まれた土に混入しており、原位置を留めるものはない。

以上述べてきたように、本調査では遺構は検出されず、遺物も原位置を留めるものはなかった。その結果を踏まえ、工事は予定通り施工した。(清喜裕二)

後嵯峨天皇 嵯峨南陵見張所改築工事箇所の立会調査

後嵯峨天皇嵯峨南陵は京都市街地の北西、嵯峨野の天竜寺内にある堂塔式陵墓である。今回の調査は、陵前に位置する見張所の改築に伴い、その基礎工事箇所(平成11年1月18日～22日)及び電気管理設箇所(平成11年1月25日・3月5日)の掘削に立ち会った。

調査区は既設見張所と同地であり、掘削の結果、土塀の基礎と考えられる石組みを検出した。

1 遺構(第23図)

調査区は全体の東側3分の2が既設見張所建築の際の基礎工事によると考えられる攪乱を受けているが、調査区西壁沿いに先述の石組みを検出した。